

平成 28 年度 秋季勉強会

『骨代謝を学ぶ』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿支部
学術委員会

「骨粗鬆症の基礎」

箕面市立病院 小児科 山本 威久

日本の骨粗鬆症患者数は約1300万人と推定されており、今後の高齢化社会における医療を考えるうえで重要な課題となっている。当院では2003年から医師会との病診連携による骨粗鬆症外来を開設し骨粗鬆症診療を行ってきている。本講演では、骨粗鬆症の病態、診断、治療について紹介させていただく。さらに、これまでの骨粗鬆症外来でのデータをもとに、骨粗鬆症診療におけるピットホールについて略説させていただくとともに、最近の学術的な取り組み(初診時の骨密度データから10年後の骨密度予測可能か?など)についても簡単に紹介させていただく。

「小児骨代謝疾患の臨床」

大阪大学医学部附属病院 小児科 北岡太一

小児科医が遭遇する骨代謝疾患には、骨形成不全症、遺伝性低リン血症性くる病、低ホスファターゼ症、軟骨無形成症などの先天的な疾患から、ビタミンD欠乏性くる病、ステロイド性骨粗鬆症、慢性腎臓病に伴う骨ミネラル代謝異常(CKD-MBD)などの二次性の骨代謝疾患まで多岐にわたる。これらの疾患の中には、胎児期に大腿骨の短縮などの異常が指摘されるものから、未熟児骨代謝疾患のように新生児期から問題となるもの、低身長などの成長発育の異常から鑑別を要する骨系統疾患、そして慢性疾患の長期治療の中で生じる骨代謝異常などがあり、診断・治療として診療に関わる時期も様々である。今回は、多くの骨代謝疾患の中でも、頻度の高い疾患のみでなく、稀少疾患ではあるが新規治療法の見出されたものも含め、具体的な症例から、診断のポイントとなる骨X線所見、診断や治療方針の決定に必要な骨密度評価など、臨床的な側面から学ぶ機会としたい。

「最新の関節リウマチの治療

「Comprehensive Disease Control (CDC) から治療漸減へ」

大阪市立大学大学院医学研究科 整形外科学教室 乾 健太郎

近年の関節リウマチ(RA)診療のめまぐるしい進歩は、的確な早期診断技術と有効性の高い薬物を用いた治療戦略の向上によるところが大きい。この結果、関節破壊をもたらすRAの自然経過を大きく変えられるため、パラダイムシフトが生じたと評されている。従来の治療目標である臨床的寛解はもとより、構造的寛解、機能的寛解をも満たすCDCが達成されることも稀ではなくなった。一方、寛解を維持できた症例に対し治療を漸減する研究も世界中で進められ、個々の症例に応じたきめ細やかな対応も広まりつつある。本講演では、RAの診断技術の向上に至った経緯に加え、鑑別を要する代表的な疾患を概説する。また、画像を用いた診断・病状の評価についての近年の技術の向上についても触れた上で、一般的なRA治療方針と最近の治療傾向について述べたい。また、RAの合併症として問題となる骨粗鬆症についても我々の研究結果を含め解説する予定である。

「骨塩定量の基礎」

神戸大学医学部附属病院 放射線部 甲山 精二 先生

高齢化が進む現在、骨粗鬆症は患者のADLやQOLに大きく影響を与え、罹患者数は増加傾向を示し、1300万人に上ると推測される。米国立衛生研究所(NIH)におけるコンセンサス会議では、骨粗鬆症の定義を「骨強度の低下を特徴とし、骨折のリスクが増大しやすくなる骨格疾患」とし、骨強度とは骨密度と骨質の2つの要因からなり、骨密度は骨強度の7割程度を占め、骨質には骨微細構造、骨代謝回転、微小骨折、骨組織の石灰化度などが規定された。

現在、骨密度測定方法には、比較的簡便なradiographic absorptiometry RAや定量的超音波測定法や、精密検査では主にdual-energy X-ray absorptiometry DXAが用いられる。測定部位は、末梢骨として第二中手骨、橈骨、踵骨、躯幹骨として腰椎、大腿骨近位部などが挙げられ、骨折により寝たきりになるリスクが高く、生命予後にも大きく影響を与える体幹部測定は、重要となる。今回は、腰椎および大腿骨近位部のDXAを中心に、基本的なポジショニング、解析方法、影響を与える因子等について解説したい。